
Air force

篠宮 夏希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Air force

【NZコード】

NZ8612Y

【作者名】

篠宮 夏希

【あらすじ】

物語の舞台は、今より少し先の未来。

未来では、未成年による失踪事件が多発していた。

そして、主人公は変な人物と出会い、気絶させられてしまつ。

次に目が覚めたのは、訳もわからない森の中…?

全く新しい（？）かは分かりませんが、SF系ファンタジー始動！

第一話・シルクハット

2089年。

気が付けば、日本は科学先進国となっていた。

今俺が歩いている街中も、ゴミ拾いロボットや警官ロボット、さらには店専用の宣伝ロボットなどもいたりする。

形なんかは様々だが、その役目に最も効果的なものが採用されるのが普通だ。

例えば警官ロボ。

こいつはボディが小さく作られており、動きが素早い。内臓機能で、指名手配犯を全員インプットしてたり、手錠にスタンガン、ゴム弾なんてのも装備されているらしい。

物騒な世の中になったもんだ。

と言つても、俺は現代人なので昔のこととは知らないが。

俺は、立ち止まり、喉を突き出しながら空を見上げる。

周りには超高層ビルが数建。

その上を、新型旅客機が通過している。

さすがに、どこかのSF映画に出でてくる、空飛ぶ車の実現には『まだ』いたつてないのこと・・・。

しかし、科学が進化する一方で、犯罪の方も凶悪で犯しやすくなっているのも事実。

万引き防止などをチェックするための機械。

あれが店内の出口には必ず取り付けられているため、店の方も安心できた。

だが、それもついこの前までの話だ。

科学が進化したおかげで、その機械の機能をジャミングするモノが最近出回っている。

そのため、多くの店舗が防犯カメラの設置数を増やしているらしい。

所詮、人間とロボットだ。

どれだけ頑張つても、犯罪者が居なくなるといつことはない。

いくら科学が進化しても、たつたそれだけの話。

いつの時代もこの構造は絶対崩れないのだろう。

それだけは、変わらない気がする。

「またか・・・」

俺はテレビ放送局のビルに取り付けられている、巨大ＴＶを見ながら一人呟いた。

ニュースで報道されているのは、最近頻繁になってきている『未成年連續失踪事件』について。

この連続失踪事件は、今年の春頃から起き始めていることが最近明らかになった。

ということは、もうかれこれ3ヶ月は経つてことになる。

それだけ時間が経過していながら、姿をくらました人々は『誰一人』として、発見されていない。

「えー、今日一日だけで、分かつてている失踪者は20人以上と警察署からの報告です。

未だに原因は不明とのことですので、みなさまも十分ご注意ください。それでは、」

ニュースキャスターが一礼して、ニュースは終了。

それと同時に、時刻は21時を迎えていた。

「ふう、そろそろ帰らないと俺も危ないな」

俺はTV画面から目を離し、再び足を進める。

危ないというのは、先程のニュースでやっていた原因不明の、不気味な失踪事件のこともあるし、何より俺は未成年者だ。

この時間に外出していく、警官やロボに捕まると色々と面倒なことになる。

なので、そろそろ退散することにした。

・・・・のだが、

『ピーピー、現在時刻21時4分。未成年者と思われる人物発見。身分を証明してください。』

背後から、機械音声が流れるのが聞こえた気がした。

周りの視線が、俺に集まっているのはきっと気のせいだらう。

そう・・・

「信じたい！」

俺は全力ダッシュ。

ロボの方は、なんともスピードな動きで俺を追いかけてくる。不意打ちをかけて、少しだけ出遅れてはくれたが、このままだと捕まるのも時間の問題だ。

(何か・・・・何かないのか!)

走りながら、俺はこの危機的状況を回避するべく当たりを見回す。

(・・・・!)

そこで目に入ったもの。

「これなら……どうだ！」

俺は急カーブをして、細い路地裏へと走り込む。

普通この様な路地裏には、ヤンキーやナンパ、薬物の売人達のテリトリーだつたりするものだ。

もちろん、それを取りしまわない口ボではない。

しかも、細い路地は妙に入り組んでいて、遠隔操作の警官口ボの効果が薄れる。

『ビー！ ビー！ こちら、a - 149。路地裏にて怪しい人物を多數確認。確保します。』

「ザザ・・・、了解。こちらも、今向かっている」

人間の警官からの指示を受け、ロボは強力ネットを発射。

細い路地に、巨大なクモの巣ができた。

「ツ・・・！？ やべつー！」

巨大なクモの巣は、走っている俺の身にも降りかかるてくる。

俺は、さうにスピードを出して、左へと曲がり、どうにか回避。

『jeeーーー！ jeeーーー！ そこの者、止まりなさい』

後ろからロボの声が聞こえてくるが、止まる気はない。

そのまま右へ、左へ、さらに左へ・・・・。

俺は、狭い路地を5分間も走り抜け、ようやくロボを巻いた。

「ハアツ・・・・・ハアツ・・・」

久々の全力ダッシュを5分間持続し続けた俺の額からは、汗が垂れる。

少し歩くと、広めの道路に出た。

建物の壁に寄りかかりながら汗を拭う。

「ハハツ、これは師匠に感謝しなきやな」

息切れしながらも、恩師に感謝を述べる。

別に師匠は口ボから逃げるために、俺を鍛えてくれたわけではない
が・・・。
まあ、よしとしておいつ。

「つふつ・・・・・

大きく息を吐いて、家へと帰ろうとする。

「つて、じにはどうだ?」

俺が出た道路は住宅街で、家の所々に明かりが灯り、笑い声が聞こ
えてきた。

(・・・楽しそうだな)

正直言つて、ちょっと羨ましかった。

俺の家族は、俺に、双子の妹弟、母さんの4人家族。
本当は5人だったのだが、父さんは俺が中学に上がる頃・・・つま

り1年と少し前に他界してしまった。

研究者という職業柄、なかなか遊んでもらうことはできなかつたが、面白くて、優しい父さんだつたと思う。

死因は、母さんからは詳しく教えてもらえないし、そこまで知りたいとも思わない。

なんて、むかしのことを思い出しながら、携帯の画面を眺める。

現在の位置情報を確認しながら歩く。

『ドシンツー』

携帯の画面に意識がいつていたため、周りを見ていなかつた俺は人とぶつかつて倒れた。

「イテ・・・。つと、すいません。大丈夫でしたか？」

俺は、ぶつかった人物の方に目をやり、硬直した。

その人物は、なんとも奇妙な格好をしていたため、驚いたのだ。

頭にはシルクハット、タキシードに杖。鼻より上は仮面で隠れていて見えないが・・・。

こんな蒸し暑い日に、なんて格好をしているのだろう。

今日の最高気温は、31度。

いくら夜とは言つても、25度くらいはあるだろ？。

そんな時、人物は俺に手を差し出していた。
珍妙な格好に見とれ、気がつかなかつたが・・・。

「あ、ありがとう」ゼ・・・ツー？」

俺が手を握ろうとしたとき、急に人物からとてつもない悪寒を感じた。

（何か嫌な予感がしないでもないような・・・）

そつ、まるで早く握れと言わんばかりのようだ。

不気味に感じた俺は自分の足で起き上がる。

人物は手を差し伸べたまま首をかしげている。

それに対し、俺は「以後、気を付けます」と礼儀正しく述べ、立ち去る。

『これは面白い。』

唐突に声が届いてきた。

今まで何もしゃべらなかつた人物が、よつやく口を開いたのだ。

ゆっくり振り返つてみると、男は杖をぐるぐると振り回し、なにやら意味有りげな笑みを浮かべている。

『これを見破られたのは、あなたが初めてですよ。』

そう言つた男は、差し伸べてきた手と反対の服の袖からスタンガンを出して來た。

バチバチと、唸りを上げながら青っぽく光る。

「そりゃい。それで、俺なんかに何の用？」

生憎、俺は友達というものが少ない。

この、どこか抜けている性格のせいだろうか？

いや、自覚はしてるからそこまで酷くないと思つ。

どっちにしろこんな変人は近寄りたくない、というのが正直な感想だ。

『いや、あなたにちょっとした実験に付き合つていただこうかと。』

「実験？」

意外なことを言われたものだから、俺は思わず聞き返した。

『ええ。他にも人員を投入しているんですが、なかなか合格者がでなくて困っているんですよ。』

合格者？

「なんの」とだ？」

フフフと、男は笑った。

『それは、あちらに着いてからにしましょう』

『こいつはせりきから何を言つてるんだ？

訳も分からず、俺は男を見つめた。

『おやおや、そんな田で見つめないでください。照れてしまいますっ！』

「ツ・・・!?

男は勢いよく一歩りへ、突っ込んできた。

右手に杖、左手にはスタンガンと、非常に危険だ。

まずはじめに、杖を向けてくる。

それを躊躇したかと思つたら、スタンガン。

いくら俺でも、これを長時間耐え続けるのは厳しい。

「チツ！」

舌打ちして、俺は男の持つっていたスタンガンを蹴り飛ばす。

しかし、男は気にせず杖で攻撃してくる。

「クソッ・・・」

一度間合いを取る。

『先ほどにプラスして、これほどとは・・・。今回はいい収穫ができましたかね。』

今回はつていいとは、何回もやつてるのか？

考えれば、考えるほど疑問が浮かび上がる。

「ハツ、悪いがあんたに収穫される気はないぜ？」

ちよつとかつこつけて言つてみる。

『それは困りましたね・・・仕方がない、あれを使いますか。まあ、まだ試作段階ですけど、あなたなら大丈夫でしょう』

男の周りから、バチバチと何か音がした。

それは、青く光散らし、男の右手に集まっていく。先程のスタンガンという訳ではない。

「おいおい・・・なんだよそれ

俺は自分の目の前で起つていて、信じられなくて声を漏らした。

男のそれは、超能力や魔法などとしか言い表しようがなかつたのだ。

『これは、まだ試したことがないんで、加減がいまいちわかりませんが・・・・。

ちょっととぐらいい痛い思いをしても、悪く思わないでくださいね?』

そう確認を取つた男は、俺に光るものを見ながら飛ばしてくる。

躲すとか、そんなレベルじゃなかつた。

ただ目の前に、巨大な光が現れて、俺は飲み込まれていつた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア・・・」

住宅街に、強烈な光と叫び声が響いた。

第一話・森の中（前書き）

おはようございます、じんにあわ、じんばんわ。
作者の夏希です。

エア フォース第一話でござります。
よろしくお願ひします。

第一話・森の中

紅葉、知つてゐるか？

なにをだよ。

(これは・・・俺の記憶?)

とあるアメリカの作家がいつたんだ。

男は強くなければ生きていけない、
優しくなれば生きる資格がないと。

いや、いきなり言われても意味わからんないから・・・。

つまり、俺がお前に言いたいのは、強くなれ！ そして優しく…。
そのまんまで分かりやすいだろ？

確かにそうだけど…。なんで今それを言つんだよ。

(「の声…・親父なのか？」)

誰よりも大きく育て。
もし俺が命にこれなくなつても、誰かを守れるだけの力を身につけるんだ。

・・・・まあ、分かったよ。

よし…じゃあ、お前にこれを渡そー！

これが、俺が見た最後の親父の姿。
その日もいつもと同じように、「じゃあな！」。

そう言って家を出でいった。

「・・・・・」

(「このまに俺は眠つていたんだ?」)
田をひすりながら、周りを見て回す。

「んこふ・・・・・」

もつ一度、田をこすって、頬を引っ張ってみる。

うん、痛い。

これは夢じゃない。

「ビーッだよ・・・」

俺が田を覚ました場所は、森の中。

俺の頭が正常だったのなら、こんな場所で寝るはずがない。

なら・・・・・

「なんで?」

キヨトンと、しながら首をひねる。

(えっと、俺は寝る前に・・・)

額に手を当て、それっぽいポーズをとる。

「やうだよー、あの仮面にやられたんだー！」

記憶を絞り出して、俺はようやく思い出した。

警官口ボから逃げて、帰ろうとしたときにあいつに襲われた。

でも、最後に見たあれはなんだったんだ？

そりひ首をひねる。

しかも、目が覚めたら変な場所にいるし・・・。

どうなつしる？

「だああああああ、ちくしょう！」

どでんと横になる。

(訳が分からん)

森に吹く風が少し心地いい。

木の香り、鳥の声、ぽかぽかした太陽。

何か、今までの自分が馬鹿みたいに思えてきた。

『バキバキ！』

ほら、バキバキって爽快な音もする。

おまけに、地面は揺り籠のように揺れる。

なんだか眠たくなつてきた。

「ふああ・・・・」

『バキバキ！ ズシーン！』

なんだか響きのいい音が途絶えたと思つたら、俺を照らしていた太陽が隠れた。

「ん・・？」

急に寒くなってきたものだから、思わず片目を開ける。

それは、太陽と重なっているためよく見えなかつた。

だが、俺の顔の横にダラダラと、なんだか汚い液がたれてきたことでちょっとした危機感を覚える。

上半身を軽く起こしながら、それをしっかりと確認しようとある。

見た目は3メートルくらいで、その表面はウロコに覆われていた。口からは牙が何本も見え隠れしていて、眼には俺の姿が移りながらも輝いていた。

「おじおじ・・・・・冗談はおやめなさいよ・・・

ゴクリと喉を鳴らす。

俺は、またもダツシユする。

後ろからは、小さなロボット。

・・・なら、まだ良かつた。

あれはどう見ても恐竜か、ゲームとかに出でるモンスターだ。

デシンドシンと言しながら、恐竜は追いかけてくる。

距離は5メートルといったところだろうか。

恐竜は、その大きさからは想像できないスピードと俊敏さだ。

後ろを振り返る。

「ゞゞわあああああああー！」

半分涙田になりながら、逃げる」と一三分。

恐竜を巻いて、森から脱出。

『グアアアアアア・・・』

遠くからまだ声がしてくる。

「こりも来るかもしぬないので、慌てて移動する。

「とこりか、今は走ってばかりだな・・・」

いや、でも今日つて表現の仕方は正しくないのか？

眠る前は夜だったけど、こじりやもう朝だし・・・。

「おー。」

考え事していると、少し遠くに街らしきものを発見。

でもその街は、日本とは全然違つ作りのようにも見えた。

「 とりあえず行ってみるか」

そう言って、街へと向かった。

一人の少年が、街へと向かつて歩いている頃。

森の中では、全長3メートルはあるであろう恐竜が暴れていた。

少女は、強大な力を感知してここまでやつて来たのだが……。

「ここいつのせいなの？」

一人つぶやき、途中拾ってきた石を恐竜へと思いつきり投げつける。

『ギュアアアー。』

少女の存在によつやく気がついたのか、ギロリと目をむき出していく。

「そんなわけないか……」

かなり残念そうな少女は目を瞑り、ため息混じりに唱えた。

「 破壊の雷よ、滅せ。」

少女が目を開けるのと同時に、轟音と衝撃が森中に響いた。

恐竜がさつきまでいた場所には、大きなクレーターのようなものができていた。

少女は、ここに来る途中に突如感じた大きな力。
その正体を探りながら声を漏らす。

「あれほどの力・・・一体あなたは誰なの？」

第一話・森の中（後書き）

こんな作品を読んでくださってありがとうございます！

次からは、最悪でも一日に一話程度のスピードで更新していきます！

第三話・ヤンキーとハーブ（前編）

おはようござるこまく、 じとしあわ、 じとばんわ。

夏希でござれこまく。

第三話始まりました。

よひしへお願いできたうなーと思こます。

第三話・ヤンキーとワード

あれから何分もしないうちに、俺は街へとたどり着いた。

途中で、なにやら大きな音が森から聞こえてきたのだが、さっきの恐竜が暴れているのだろうか。

「おお・・・」

街は遠くから見るとそつでもなかつたが、入口まで来てみると結構なでかさだった。

中に入り、少し歩いてみる。

通り過ぎる人々の格好は、まるでファンタジーゲームに出でてくるような格好をしていた。

しかも、その人々の視線が俺に集まっている。

(なんか、これも最近体感したような・・・)

ちよつと濡れながらひつむく。

(どこのか、情報がもらえないような場所はないかな……)

俺は、とりあえず情報が欲しいと思つたのだ。

街に入ったときに、雰囲気からして外国なのかとも思つたが、歩いている人たちの顔は日本風で、屋外のカフェ的な場所から聞こえてくる話声も日本語だ。

(まったく、ここはどこなんだよ……)

ますます訳が分からなくなつてきた。

(おー、あそこなんかで情報が聞けたりしないかな?)

俺は、人々が集まっている場所を発見。

何かを中心に囲んでいるようにも見えたが……。

「ねえ、これは何やつてんの?」

気になつた俺は、近くにいた男に話しかけてみた。

男は、俺の方を見てしばらく顔を覗めていた。

「聞いてる?」

「おおづー?」

と、驚きながらも男は答えてみせた。

「喧嘩らしこぜ。あの顔を隠してほつが、ヤンキーに吹っかけたらしげー」

俺は、人ごみの中心に田をやると確かに見た目ヤンキーがいた。その前には、男に胸ぐらをつかまれて格闘なグレーなフードを被つていて顔が見えない。

それを俺もしばらく見ていく。

ヤンキーはガミガミと怒鳴りつけているが、対してフードは黙つてそれを聞いてるだけだ。

「てんめえ・・・・!」

俺が見物し始めてから、3分位たつた頃だらうか。

無視し続けるフードに、ヤンキーはさすがに疲れを切らしたようだ。

「なめんなよー!」

さすがヤンキー。

なんとも古臭いセリフを使つてくれる。

しかし、大きく振りかぶったヤンキーの攻撃はハズレ、見事に空氣をつかんでいた。

フードはいつの間にかヤンキーの腕をすり抜け、気が付けば人ごみの中に紛れ込んでいた。

「フン、だから止めとけといったのだ。お前程度では相手にならん」

「なつ・・・・・んだと、てめえ！」

俺から見ても、ヤンキーじゃあのフードには、一撃も食らわせれないだろう。

ヤンキーが本気を出していないなら別だが、それはないと思つし。

なんとも無謀なヤンキーは、フードのいる人混み目掛けて走った。見物者は、慌てて退散。

「やれやれ、まだ来るのか？ どうやら、一度力の差を見せせてやらねばないらしいな」

「余裕こじてんじゃねえ！ これが俺のくエアだ！」

そう言つた後、フードの周りが急に爆発した。

何が起つたのかよく理解できなかつた俺だが、ヤンキーの攻撃は

止まらない。

ヤンキーが次々と爆発を起した（～）せいで、辺りは砂ぼこりが立ちこめつていてる。

「ゴホツ・・ゴホツ・・・」

実は、隠し球を持っていたのか。

（これはとんだ誤算だったな・・・。）

心の中で呟く。

数秒したといいで、ようやく見晴らしが良くなつていぐ。

「ハツ、跡形も無く散つたか。俺をなめて掛かってくのからそつなるんだよ！」

お前は馬鹿カツ！？

つて思いつきり突っ込んでやりたい。

ヤンキーによる、爆発はすぐかつた。

ただ、すぐかつたが跡形もなくは無理じやないか？

普通骨は残るだろうし、フードがこれくらいでやられるとも考えられない。

その時だ。

ヤンキーが横方向にぶつ飛んだ。

目測だが、軽く10メートルは飛んだのじゃないだろうか。

その一方で、先程までヤンキーが立っていた場所には、フードがいた。

俺が考えていたとおり、フードは生きてこる。

そして言った。

「ま、立ってみせ。まだ終わったわけじゃないぞー。」

ヤンキーは力を振り絞って、なんとか立ち上がりつつしている。
そこへフードが駆ける。

「まじめ、やつらまでの威勢はどうしたー?」

まだ完全に立ち上がっていないのに、フードは容赦なく蹴りを入れる。

見物者も、見るのに耐え難いのか、その場を離れるものが増えていた。

「ゴハツ・・・・・」

ヤンキーが血を吹き出す。

それを見てもフードは止めようとしない。

「おーおい、こんなとこで物騒なもんはやめてくれよ・・・」

近くの男が深刻な・・・青ざめた表情で言った。

さすがに俺もこんなのは見たくはない。
余りにも一方的すぎて、話になつていない。

「クッ・・・・・！」

俺は拳を作つて、思い切り力を込める。

爪が肉に食い込んできて、タラタラとなにか生暖かいものが流れ出
た。

必死にこらえる。

ここで俺が助けてもいいのだろうか？

「ガハッ・・・・・！」

攻撃が止んだところで、ヤンキーが息を吸い込もうとしている。

「フツ、これで分かつただろう。貴様程度、私たちの相手などではないわ！」

フードは腰に刺していた剣を、音を立てながら抜き取った。

(あいつ、本気か！？)

そうでないと信じたいが、口元からは不気味な笑い声を発している。

「くそ！ 悪いがこいつを借りるー！」

俺は近くにいた男から、ほとんど無断で剣を抜き取り〇から一気に加速させる。

風が俺の頬を撫でる。

見物者からは、女性の悲鳴も聞こえてくる。

目を閉じる。

二人とも距離は、8メートル。

既にアーブの剣は降りおろされている。

(頼む)間に・・・・

「間に合ええええええええええええええ！」

『ギャイーン！』

金属同士がぶつかつた。

俺の剣と、フードの剣だ。

「どうか間に合つた。

心の中で、少しだけ安心する。

「誰です、あなたは？」

フードは先程までの狂氣をどこかに、静かな声で聞いてきた。

「ここつを助けにやつて来た、ただの乱入者だ」

剣を重ねながら、俺は後ろにいるヤンキーをちらりと見る。

「もう十分だろ？　ここつはもう立てないんだぞ？　これ以上痛めつける必要がどこのあるんだよー？」

最後の一言は怒鳴った。

それまでにヤンキーのやられ用は酷かつたのだ。

「ただの乱入者あなたに何が言えるのですか？　邪魔です、退いてください」

フードが殺氣を放つてくる。

軽くひるんだが、この程度でやられる俺じゃない。

「それは・・・できない」

辺りが静まり返った。

誰もが俺たちの行く末を観察している。

「そうですか。それは残念です、犠牲者がまた一人増えたわけですから！」

フードは一度剣を引き、俺の体制を崩してきた。

崩れた体制からフードの方を見ると、めくれた場所から狂喜の表情を見せていた。

「さよなら、お元氣で」

静かに、ニヤニヤしながら俺に向かっていった。

「悪いが、まだ死ぬつもりはないんでな」

「えー？」

フードは、自分の肩に置かれている重さを確かめながら、驚いていた。

それもそうだ。

なんせ、今自分が切りつけたハズの男が、逆に剣を突きつけている。

汗がじわじわと浮かんでくる。

「分かったか？　お前程度では、俺には勝てない。敗北を悟ったのなら、立ち去れ」

低い声で、威圧感を与えながら提案した。

「…………まだだ……！」

提案は受け付けてはもらえなかつたようだ。

「はあ・・・」

非常に残念な表情をする。

フードは、クルリと剣を握つたまま一回転してきたが、俺は既にフードの後ろに回り込んでいた。

「なっ・・・・・ー？」

なぜまた後ろを取られているー？

といったところだらうか。

「くうつ・・・・・・・・」

「どうせ、今の攻撃も見えてなかつたんだろう？」

しかし、フードは一度距離をとり剣を構え直す。

これはいい判断だと思つ。

ん？

なんか、フードの周りにあた物や、見物者の剣がふわふわと浮いて
いるんだが・・・。

その時、後ろから声がした。

「クソッ・・・、そいつの^ヒア^はヤベHー！ 早く逃げろー。」

それは倒れこんだままのヤンキーだ。

Hアツヒ、やつをヤンキーが使ってたやつみたいなのか？

つてこり」とね・・・。

俺がヤンキーの言葉を察したときには、フードのエアは完成していた。

「ハハ・・・・・！」いつは・・・

フードの頭上には幾選の剣が舞っている。

標的はもちろん俺たち。

笑えない冗談だ。

これは・・・・・もひ、うん。

「戦略的撤退だ！」

大きく叫び、俺はヤンキーをおんぶし、速攻で消え去る。

後ろからは、大量の剣を従えたフードが追ってくる。

じつで、本田（？）3回目の東京Jは始まった。

かと思こきや、フードは案外あっさりと諦めてくれた。

「ハア・・・ハア・・・ハツ・・」

細かく呼吸をして、高まる心臓を静める。

ちらりと横にいるヤンキーの方を見てみる。

なんだかぐつたりとしながら壁に寄り添つている。

「あの・・・大丈夫ですか？」

ぴくりとも動かないで、声をかけてみる。

・・・・・・・。

返事がなかなか来ない。

「ああ、悪いな。少しボートとした」

よかつた、意識はあるみたいだな。

「お前、名前は？」

ヤンキーが俺に聞いてきた。

「俺は、一条 紅葉（いちじょう クレハ）。最近16になつた」

「紅葉か・・・。俺は冬月 翔（ふゆつき しょう）だ。紅葉と同
い年だな」

この人俺と同じ年なの!?

正直言つてかなり驚きだ。

見た目からして、19はいつてると思つてたのに・・・。

やつぱり見た目で人を判断するのはいけないな。

「改めて礼を言わせてもらおう。ありがとう」

「いえいえ。いつかとこで聞いてみたい」とがあるんだけど・

「・

「別に構わない」

「それは良かった。よろしく」

赤い夕焼けに照らされながら、俺は手を指し伸ばす。

翔も、軽く笑いながら握ってくれた。

「ひつりむよろじく頼む。お前から学べそうなことがありそうだし
な」

手を握つたまま翔を立たせる。

「それじゃ、どこかゆづくべき場所に行きたいんだけど

このままでいるのもなんだし。

「ああ・・・それなりの通りを真っ直ぐ歩いていけばカフェみたいのがある。そこがいいだろ?」

そう言われ、俺は翔の肩を抱きながらカフェへと向かうのであった。

第三話・ヤンキーとワード（後編）

読んでくださってありがとうございます。

今回は何かスグー微妙な感じで終わつたのは僕にせす、スルーで。いや、言い訳でしかないんですけど、この世界についての説明が思つたより長かつたので、次回にします。

そして、次回の次から本格始動！
第一章が始まります！

第四話・あるカツハにて（前編）

おはようござります、 じとこちわ、 じとばんわ。

夏希でござる。

いつもこの世界にてご説明することができた。

これから少しあやくなつてこゝのかな？

それはわかりませぬがどうぞ。

第四話・とある力にて

時は少し遡る。

これはとある少年たちが鬼ごっこをしている時だ。

「クソ、油断した。まさか逃げるなんて……」

フードを深くかぶった少女は、前方を走っている一人の少年たちを追いかける。

しかし、そのうちの一人は先程少女が痛めつけたため、もう一人の赤髪の少年におんぶされている。

（少しづつだけど距離も縮まってきたし、ここから剣を飛ばせば当たるだろうか……？）

少年たちとの距離は、およそ15メートル。

頑張れば届かない距離でもない。

（試すだけ試してみるか）

少女はぺろりと舌を出し、集中しようとした。

しかし、田の前に人影が見えたのでそれを中止。

靴を地面と擦り合わせながら、急停止する。

「どうにか止まった少女は、ロボットのような動きでその人物の顔を拝見する。

「ゴクリ……。

「た……隊長……」

隊長と呼ばれる女性は、ニッコリと笑つてみせる。

だが、目が笑っていない。

「あなたのエアまで出して何をやつていたの？」

少女はどうにか言い訳を考える。

「えっとですね……ちょっとしたトラブルが起きました、それを対処するために……仕方がなく……です」

嫌な汗が体中から滲み出していく。

「まあ、いいでしょ」

（ふう・・・・なんとかなった・・のか?）

少しだけ安心した少女。

（でも・・・あの赤髪・・・・）

少女は先程の戦闘を思い出していた。

（動きがただものじやない・・・・。でも、服は向ひのままだつたし・・・・）

隊長の横を歩きながら考え込む。

（もしかして新参者?　でも・・・見たところ服は新しそうだった
し・・・汚れも無く）（までもこれるとは思えない）

・・・・・・・・・・・・

気づかぬ内に少女は立ち止まっていた。

(一体どういったのなの・・・?)

「じりかしたの?」

隊長の言葉で、ようやく戦に帰る。

「いえ、向でもあります」

「やつ、なじ行きましょう」

「はー、すみません」

駆け足にならながら隊長の後ろを追っていった。

『カラソカラーン』

鈴の音が店内に響き、俺たちの入店を知らせる。

「いらっしゃいませ」

店員と思われる男が、深々と一礼して席へと案内してくれた。

「(注文はお決まりでしょうか」

店員が訪ねてきた。

てか、今来たばっかなのに決まってるはずないだろ。

「じゃあ、コーヒー頼む」

いや、おい！

ここは俺も流れに乗らないとあればな・・うん。

「んと、カフェオレで」

「かしこまりました」

店員が店の奥へと入つていった。

「それで？俺に聞きたい」とつていつのま？」

翔が早速持ちかけてきた。

「ああ、それなんだが…………。まず、ここがどこなのか知りたい」

「ここは都市カルネアだが」

うーんと……話がかみ合つてしませんね、はい。

「えーと、そうじやなくて……なんていうか、ここ自体がどこか知りたい。まずここが日本じゃないのはわかつた」

「はあ！？ お前今まで知らないでいたのか？」

いや、そう言われても田が覚めたのさつきだし……。

「うん、まあそうだね」

「最初の説明はちゃんと聞いてたのか？」

「最初の説明つて？」

「あつただろ、最初目が覚めたとき周りにいた人と一緒に、受けな

かつたのか？」

えー・・・。

俺田が覚めたら森の中で、周りに人なんて居なかつたんだけど。

「受けてないとになるのか・・・な？」

翔は眉毛を八の字にしている。

「あの、悪いんだけどさ、先に俺の質問に答えてくれないか？ それが終わったら、こっちも説明する」

もつなんだか混乱して訳が分からん。

「そうだな、そのほうが分かりやすか」

「どうやら翔の方も納得してくれたようすで、安心した。

「それじゃあ、この世界のことについての説明するが。

「一にて、まあ」これは異世界である」と・・・・・・
「ちよつと待てーい！」「

今なんて言った？

「Jリは異世界？」

なにそれ美味しいの？

「2に・・・」

「いや、待てってー？」

完璧なまでにスルーしようとある翔をストップさせる。

「なんだよ？」

なんだよって、そんなかっこいい顔で言われても・・・。

「こきなり異世界つて・・・マジなの？」

「やうだって言つてるだる。それで、次行つてもいいか？」

正直言つて、まだ気持ちの整理がついてないんだが・・・。

「ああ、止めて悪かつた。続けてくれ」

「んじゃあ、

2に、この世界の脱出方法。

この世界から、元の世界に戻るには、バスを倒さなければならぬ

らしいな。

攻略していく内にわかるそうだが、今はまだそんな情報は入っていない。

3に、力について。

この世界に来たものは必ず、ある能力に目覚めるそうだ。
それがさつき俺たちが使つていた「エア」だ。
エアは、人それぞれ使える技が違うらしい。

4に、敵やお金。

まず、敵は主に街の外にしか出ない。

俺たちは普通にモンスターと呼んでる。

そのモンスターたちには、必ず核（コア）がある。

それを破壊することによって、モンスターは消滅しアイテムを落とすんだ。

それを売却してお金に、食料なら調理することもできる。

5に、ギルドやチーム。

これは最初に説明はされなかつたが、知つておいた方と思つから説明しておく。

ギルドはゲームなんかでもあるように、大人数で行動したり、メンバー同士で狩りを行なつたりする。

大きなギルドは『エスケープ』と呼ばれている奴だな。位なんてのも用意されているらしい。

チームはギルドほど大人数ではなく、ごく少数で攻略を目指しているモノたちだ。

と、まあこんな感じだが、質問はあるか?」

随分と丁寧なご説明で・・・。

「えっと、力についてのエアだが、どうやつたら使えるかが知りたい」

「そうだな。<エア>を使うにあたって、必要なのは想像力と集中力かな。最初に使った時は、脳みそが痛くなるが慣れればなんともない。

あと、慣れればなれるほど技のイメージが固定されて、より強力に、スピードにもなる」

なるほど、要は努力に勝るものはない。
ということか・・・。

「それは分かつたが、さつきエアは人によって違うとか言ってなかつたか?」

「おつと、忘れてた。じゃあまず、ポケットになんか入ってないか?」

・・・?

まあ、とりあえず言われたとおりにしておこう。

俺はジャージのポケットを探る。

『むぎゅー』

何か今むぎゅーとか言つたぞ？

俺はそれをつまみ、確かめる。

「これは、風船・・・？」

俺が手にしているのは、黒く彩られた風船。
どう見てもただの風船だ。

「ー」の風船がなんだ？」

「後でわかるぞ。

次に、風船を口を使わずに膨らましてくれ

「はあーー？」

口を使わずに膨らます！？

確かに人間皮膚呼吸はしてるけど、いくらなんでも無理だろ。

「すまない、言い方が悪かつたな。膨らますイメージをしてくれ

なんだ、イメージか。

なら結構簡単なんじゃないか？

とか思つたが、案外難しいかつた。

「ほら、力を抜け。ゆっくりと、自然に膨らんでいくようなイメージだ」

（そう言われてもなあ・・・）

リラックスして、一度息を吐く。

「ふう・・・」

目を閉じて、イメージ。

『ツバアアン！』

「つおー？」

ものす」。破裂音がカフェ店内に響いた。

それを近距離で食らった俺は、耳がキーンとしている。

驚きながらも、当たりを見回すと翔の姿がなかつた。

「いやー、相変わらずでかい音だな・・・」

離れたカウンターから、翔が姿を見せる。

「お前・・・確信犯だろ！ さつきまでフラフラだつたくせに、なんでそんなとこに行つてんだよー！？」

「いやいや、ただ疲れと痛みをとるための薬が売つてたから買つて飲んだだけだ。決して、大きな音が鳴るのを知つて逃げたわけじゃない」

その言葉が逆に怪しいんだが・・・。

ところかそんな薬があるのか？

「まあいいや。それで？」のあとどうすればいいんだ？

「割れた風船の中から、なんか紙が出てこなかつたか？」

風船の「ゴムが散らかっているのをビシしながら、探してみる。

「…………ないんだけど」

机の上には、なかつた。
ならぬぞ！

ダメだった……。

「おこ、その紙には何が書いてあるんだ？」

「使えるHアの名前。俺は『爆発』って書いてあつたな

え？

それってないとまざいんじゃない？

「つまり、それがないとHアが使えない……？」

「使えないはなないが、自分のHアがわかつてないから発動できない
と想つぞ。」

つまり使えないんじゃん！？

チーン。

俺才ワタ

「んでさ、お前の方からの説明は？」

「」の非常事態を華麗にスル——!?

俺はこんなになつてゐるのに・・・。

「だつてないものはしょうがねーだろ。諦めろ」

「諦めろじゃ ないでしょ！？ 他に調べる方法はないの？」

「ない」

即答された。

「ここから説明しりょく

怒られた。

「グスッ・・・・。えっと・・・俺は向こうの世界で、変な仮面の男に襲われて、その後田が覚めたら森の中だつた」

事実だしね。

「モンスターにやられて、ここは世界の記憶がなくなつたとかは？」

「うーん・・・・・・。

「ない」と呟つやぐ？

「わうなのか。まあやつちでもここはやつちでもここナビや・・・・・」

「聞ことこでやつちでもここはやつちなどだよー・・・」

すかせゅうしき リリ

「せつあかひつむせんよー」

『モンハン』

俺の頭に鈍い衝撃が・・・。

翔によるババチョップだ。

「イツテー！ お前、命の恩人になんて・・・」

「そんなことより、俺が知りたいのはあのく強さくについてだ。お前はエアも使えない。なのにどうしてあんなに強いんだ？」

「ん？ それはもう、向こうで師匠に鍛えてもらつたからな」

そう、俺は向こうの世界で武術全般を、師匠から教つたからこそ、ここまで強い。

自分で強いとか言つちやつたよ・・・。

「それを俺にも教えてくれないか？ 俺も強くなりたいんだ！」

身を乗り出して、翔が頬み込んでくる。

「ああ、別に構わ・・・」

ん？

そこで俺はひらめいた。

「十一座して、『俺を強くして貰おう』って言つたらいいぞ？」

自分で言つておきながら、なんて悪趣味なんだらう。

「・・・・・・・・

翔は席から立ち上がり、俺の横に来る。

まずは膝を付け、震えながら手をつぶ。

おやうのプライドが許さないのだらう。

それからうつと頭を下げていく。

「お・・俺を強く・・・して貰おう・・・・・・・・・・・・

「ん？ 聞こえないなあ？」

わざと焦らす。

「し・・・・・・死ねええええええええええええええ…」

吹っ切れた翔が、ババチョップをしてこうとする。

「その技は見切ったああ！」

紙一重で躲す。

『バリーンー！』

何か、フシユ〜とか言いながら、俺の後ろにあつた花瓶が割れてる
んだけど・・・。

「分かつた、分かつたからもうやめる！」

一撃目を繰り出そうとしている翔を、慌てて制する。

「フルルルルルウ・・・・

なんかどつかの獣みたいになつてるナビ、びつにか落ち着いてくれ
たようだ。

「あつがといへりぞこました」

店員がまたも礼をして、俺たちはカフェを後にした。

といつか、あの割れた花瓶はどうするんだ？

弁償代とかも請求されてなかつたみたいだし……。

ま、今になつて気にすることでもないが。

「といひで紅葉。いれからせんじ行くんだ？」

歩きながら、正常になつた翔が訪ねてくる。

「ん？ 修行といつたら森しかないでしょ。近くにあるみたいだし

「寝る場所は？」

「そんなんあるわけ無いじゃん。野宿だよ、の・じゅ・べー。」

最後の方を強調してこう。

「ふーん…………それって辛いのか？」

「まあ、辛くなきゃやる意味なんだろ?」

「確かにそうだが…………」

なんだか泣い顔で言う翔。

「いいから行くぞ! いざ森へ、一人つきりの籠もり修行!」

「籠もんのかよ! それと、その言い方はやめろ、気持ち悪い!」

「こんな調子で、俺達は近くの…………

あの恐竜がいた森へと向かう。

第四話・とあるカフフにて（後書き）

読んでくださいありがとうございました！

次からは、籠もり修行…！

だと長くなりそうなので、ちょいとカットしながら進みます！

いやー、今振り返って気がついたのが、3話まで名前が出てきてなかつたw

まあ、許してください。

そして、何か更新スピードが早かつたんですが次回からは分からな
いかもしません。

でも、頑張っていきますので応援よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8612y/>

Air force

2011年11月27日15時50分発行